

「平成13年度ドイツ語教育担当教員ドイツ派遣プログラム」に参加して

その他のタイトル	Ein Arbeitsbericht über das Fortbildungsseminarprogramm für Deutschlehrer/-in 2001
著者	金子 哲太
雑誌名	独逸文学
巻	46
ページ	159-169
発行年	2002-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018127

「平成13年度ドイツ語教育担当教員 ドイツ派遣プログラム」に参加して¹

金子 哲 太

筆者は、平成13年7月2日から8月27日までのほぼ2ヶ月間、文部科学省とゲーテ・インスティテュートの共催による、「平成13年度ドイツ語教育担当教員ドイツ派遣プログラム」（以下、「派遣プログラム」と略記）に参加した。

この事業の趣旨は、ドイツで開催される研修等に参加することによって、日本のドイツ語語学教育の充実を図り、あわせて日独間の文化交流と相互理解の促進に寄与する、というものである。派遣人員は15名であり、研修内容は1) 語学研修（約1ヶ月）、2) ゼミナール（2～3週間）、そして3) 個別研修（1週間）である。また資格要件としては、職務（常勤・非常勤を問わず、大学等でドイツ語教育に携わる者）、給費留学の経験（平成9年4月以降に経験のあるものは対象外となる）、年齢（満55歳以下）など一般的なものが問われるほか、前年度に開催された「平成12年度夏期ドイツ語教育研修会」に参加し、これを修了したことが前提となっている²。その際に（次年度開催の）「派遣プログラム」の派遣人員選考のための面接試験がなされるのである。

このようなプログラムのもと、私は、1) ベルリンにて語学講習、2) ゲッティンゲンにて教授法ゼミナールに参加し、3) ライプツィヒにて個別研修をおこなってきた。以下、このうちで「派遣プログラム」の趣旨に盛り込まれた目標の達成に最も大きく寄与する2) について、個人的体験に基づく見解をも交えて、述べることにする³。

割り当てられたゼミナールは、ゲーテ・インスティテュートが「外国語としてのドイツ語 (Deutsch als Fremdsprache)」(以下DaFと略記) 教育の振興のために、主としてドイツ国外で教鞭をとるドイツ語教師を対象とした、「„Fortbildung in Deutschland“ という教育研修プログラムの1つであった⁴。すべてのコースに共通の研修内容は、ドイツ語教師どう

しの意見交換，ドイツ人との交流，そしてDaF教育の専門養成などである。

私が参加したコースは„Unterrichtsprojekte“という総合テーマで，とくにランデスクンデと教授法に力点が置かれているものであった。参加者たちは全部で23名で，その出身地構成としては，ロシア系が最も多く9人，これについて日本が5人，その他中国，アフリカ，メキシコ，ギリシア，モンゴル，イラクが2人ないし1人と，まさに国際的な雰囲気の中で研修が進められた。ドイツ人講師陣3名の指導のもと，3週間の日程は，ほぼ毎日朝9時から夕方5時半頃まで続いた。

このコースには，さまざまな授業方法や新しい学習教材などについて学ぶだけでなく，参加者じたいの主体的行動を通じてランデスクンデを深めたり，さらにランデスクンデ教育へと発展させていけるように工夫の凝らされた多くのプログラムが用意されていたのであるが，このうち最も中心的なものとして位置付けられていた„Themenrecherche“についてまず述べておかなければならない。これは，参加者たち自らが一定のテーマのもと（授業）計画を立て，1つのプロジェクトを打ち出し，実際にプレゼンテーションを行う，というものである。この「プロジェクト」の基本理念には，「理論学習に偏った，個々の学習内容に統一性がない，個人学習に陥った」教育の在り方に対するアンチテーゼとして，「生徒の協調性を重んじ，生の学習対象を扱い，生徒の要求に応えうる，共同の目的達成による，学校の内外を結ぶ，生徒自らの組織を重んじた」，ドイツの教育界で長年議論されてきた教育理論が根底に流れている⁵。このコンセプトに基づいて，現在も「頭と心と手を使った学習（Lernen mit Kopf, Herz und Hand）」というモットーのもと，各方面でさまざまな授業実践がなされている，ということである。われわれ参加者たちは最初の数日間，その理論のみならず，実際の授業での試みをビデオを通して学び，これについて討論をおこなった。そして，このような考え方をDaF教育に導入する一連の試みのなかで，このゼミナールでは「プロジェクト」の1つの異なる形態として„Themenrecherche“という課題が出されたのである。

参加者たちは，全員の意見から選び出された複数のテーマにしたがっ

て4～6人からなる幾つかのグループに分かれ、各グループは独自で構想から企画、そして生産へと計画を立て、ゼミナール3週間目の期日には1つのプロジェクトを完成させなければならなかった。その予定日の昼の時間は、ゲーテ・インスティテュートの語学講座上級クラス（Oberstufe）の授業に充てられており、そこでプレゼンテーションをおこなうというものであった。われわれのグループのテーマはEssen und Trinkenというごく平凡なものであったが、ほぼ2週間のあいだ、休み時間や日課のあとには定期的にミーティングを開き、基本的構想を打ちたてることに始まり、プレゼンテーションの方法や形態についてアイデアを出し合ったり、また個人に割り当てられた仕事の進捗状況やその相互関連性についての確認や、ときには全体的な流れの軌道修正を余儀なくされたりと忙しい日々が続いた⁶。今回の場合、プレゼンテーションはいわばメッセ形式がとられることになったため、各グループは1つのブースを作らなければならなかった。われわれのグループのブースは、レストランにみたとしたものを作ったのだが、周囲の壁を写真やグラフィック雑誌の切り抜きを散りばめたヴィジュアルものに仕立て、ドイツの伝統的な飲食の習慣やこれに関連しての生活風習（誕生日、結婚式、入学式など）について主要なキーワードと簡単な説明を載せた広告風の掲示板とした。そこにやってきた学生たちには、個別あるいは数人単位で、収集した情報を説明したり、また彼らからの質問に答える、という形で進められた。

この „Themenrecherche“ については後日反省会があり、用いた手段や方法、その過程などを振りかえって幾つかの角度から確認と評価を行い、各自が担当する自国のドイツ語授業にどのように反映させることができるか、その応用の可能性について討議した。因みにわれわれのグループについて言うと、全体のチームワークをうまくとることができず⁷、プレゼンテーションに漕ぎつけるまで決して順風満帆に事が進んだわけではなかった。これらの障害は、各メンバー個人の問題のみならず、異なる文化圏出身である各人が社会文化レベルで持つ価値観の違いから生ずる文化摩擦にも原因を求めることができ、異文化コミュニケーションや異文化理解の難しさを痛切に感じた。

ゼミナールチーム主導でなされた個別プログラムとしてはまた、定評のある教科書 („eurolingua“ や „em“ など) についての詳細な品評や、各学習環境に応じたその使用法の可能性について討議をおこなったり、あるいはまた教材として授業に活用できるさまざまなテキストタイプ (例：主に生活文化を対象とした新聞雑誌の各種記事・広告文、若者の興味を引くポップミュージックの歌詞など) やその効果的な利用法 (例：演繹的、帰納的手法による文の読み方訓練、各種Liederの活用など) について学んだ。ここにみられる共通認識としては、どのようなテキストにも、ただ単にドイツ語の読み書きの能力を向上させるだけではなく、ランデスクンデ学習やさらに異文化理解のためのポイントが必ず含意されており、これを最大限に活かさない手はない、ということであり、私個人としても改めてこの点について意識するようになった。一方でまた、写真 (や絵) を用いた1つの教材タイプとして利用される „Bildersprache“ をテーマにして、ある日の日課には参加者たちが「典型的ゲッティンゲン」という題目をもらって街中に出て、思い思いのイメージで「ゲッティンゲン」を写真に収め、これをもとに全員でTextarbeitをおこなうことがあったり („Fotosafari“), またErfurtへのエクスカッションではグループごとに配られた何枚かの建物の写真を手掛かりに、その所在を探し当て、そこから浮かび上がってくる共通のテーマを見つけ出す、という課題が出されたこともあった („Spurensuche“). さらにまた、グループ単位で各種教育機関を訪問し、その組織や特色について教職員にインタビューをとり、その報告をおこなうという非常に興味深い機会も得られた。教室内での学習に留まらず、これらフィールドワーク的な作業の実体験を通じて、われわれ参加者たちは学習者の立場で生のドイツ (人) と接触、交流することができ、非常に有意義であったと同時に、こうした体験がいかに異文化学習の上で大切であるかを認識するに至った。

また、専門家を招いての講演というかたちをとることも少なからぬあった。たとえば、単なる一方的な知識供給の指導ではなく、構成的・建設的な指導 („Instruktion“ から „Konstruktion“ へ) という大きなテーマのもと、主に学習者主導の体系的指導法を提唱するKönig教授からは、しばしばわれわれ参加者が学習者になりかわって、さまざまな授業実践

例を体得した。なかでも、教材そのものの価値よりも教師自身の成長・発展が大切である、と強調する点や、学習者自らにメタレベルで自分の学習意欲や進捗状況を意識させることが大切である、などといった点が私には新鮮に感ぜられた。またKiel教授からは、主に異文化学習の理論的側面を学んだ。まず文化が担うさまざまな意味や機能、また異文化間の接触について説明があり、参加者自らがこれまでに経験した異文化体験を例にとって、異文化を意識し、受け入れる段階から、これを吸収・同化するに至るまでの発展段階の各過程やその全体的な流れについて、1つのモデル(Benett/Milton)を用いて詳細に述べられ、その際さらにコミュニケーション能力をいかに発展させるかという点にも言及された。この講演では、教育現場だけではなく、一般に人間がある文化を正しく理解するためには、文化相対主義的な観点に立って、個人レベルのみならず、一般化された社会文化レベルでの文化認識をも同時に持ち合わせる必要がある、といった主張が要点であったと思われるが、それまでに「異文化」について考えるさいの拠り所を意識的には持っていなかった私には非常に興味深い内容であった。この他、一時期日本でも教鞭をとっておられたEhlers教授からは、一方では文学テキストを用いた授業について、その基本的ストラテジーから応用の可能性に至るまでの説明を受け、他方で実際にわれわれが学習者となり、主としてGedichteを題材にTextarbeit⁸をおこなった。この教授法は、初学者には全く歯が立たない中級以上の学習者が対象であったが、学習意欲を持続して保持させることができる、という点、学習者の創造性を確実に高めることができる、という点などを明確に確認することができ、従来の日本におけるドイツ語教授法にはほとんどみられなかったこのタイプの教授法を初学者対象のものへと発展させる可能性をどうにか切り開けないものかと思いを巡らせるに至った。

以上の簡単な説明からわかるように、これらの講演はどれも、一方的な知識提供の場に終わらず、つねに講演者と参加者とのインターアクションによって進められ、講演といえども活きた授業のような場となっていたといえる⁹。

おおよその主要なプログラムはこれまでに述べてきたとおりである。

この他の、いわば課外の催しとしてはさらに、コンサート、劇、映画、展覧会などの鑑賞があったり、またゲストゲーパーを招いての懇親会 (Seminarfest) が開かれることもあった。さらに3都市にわたるエクスカーション (Braunschweig, Erfurt, Wolfsburg) が盛りこまれ、参加者たちどうしの交流や親睦が深められた。そもそも参加者たちはゼミナールチーム3名とともに、ほとんど毎日の昼食を一緒にとるように予定が組まれており、日が経つにつれ、次第に打ち解けた雰囲気になっていった。参加者たちは自国の紹介、教育事情や教授法についてのいささか固い内容の話題で議論を交わしたりする場面は最後までみられた一方で、より一般的、日常的な話題で談笑することが増えていった。なお、われわれ参加者どうしの間の意見交換から明確化してきた授業運営上の共通認識のうち、「メリハリ (Abwechslung)」をつけ、そして教師、学習者双方が「楽しみ (あるいは喜び) をもって (mit Freuden)」授業を進める、という方針が強く印象に残った。これらの点が、— 実際に効果的に作用しているかどうかは別として— 授業をおこなう際に私が日頃心掛けていた点と重なったからである。

ここで、このゼミナールの1つの標語であった「ランデスクンデ」について一言述べておきたい。すでにゼミナール開始2日目にはこの語をテーマに全員で簡単な話し合いがあった。とはいえそれは、「ランデスクンデ」を参加者がどのように捉えているのか¹⁰、またどのような過程を踏んでこれを習得できるのか (1. 知覚 2. 比較 3. 判断) といった内容のものであり、決して「ランデスクンデとは何か」という問いの答えになるような説明は (最後まで) なかった。期間を通じて何度もランデスクンデという語が用いられたが、その都度私には、単なる「対象となる国 (= ドイツ国) のさまざまな社会文化事情 (を知識として得ること)」といった画一的で一般的な定義に留まるようなものではないように思われたのである。確かにドイツの社会文化事情的な個別の知識を確実に増やすことができたのだが、それ以上に、異なる文化圏の出身者であるわれわれ参加者たちの間で交わされたさまざまな議論や彼らとの共同作業を通じて会得した「何か」の占めるウエイトのほうが各段に大きかったように思われる。この点が、私なりの「ランデスクンデ」理解へと

つながったといえる。

振り返ってみると、参加者たちがとった行動に対して、ゼミナール講師陣はほとんど明確な評価を下さず、コメントというかたちで助言してもらったことが多かった、という点、そしてたいていはFragebogenを用いて自分（たち）自身で確認し、評価をおこなうといった点を考慮しても、主役であったわれわれ参加者どうしのインターアクションが、状況判断能力やコミュニケーション能力を養成する世界をつくりあげ、ここが異文化トレーニングの場と化するように方向づける意図があったように思われる。それは、価値観の異なる者どうしの間で繰り返された、まさに「異文化理解」と「異文化間コミュニケーション」の繰り返しであった。この外国語教育上の重要な2つのキーワードは、本来われわれ教師が教えるべき「内容」として捉えられているが、このゼミナールを通じて私が感じたのは、それはまずもって教師自身によって「体験」せられるべきものであるということである。

ここに私なりの「ランデスクンデ」のイメージが浮かんでくるのである。一国の文化について考察する際には、—— Kiel教授が指摘されたように—— 社会文化レベルと個人レベルで捉える必要があるが、前者の観点から見た文化とは、いわばKulturstandard的な知識として捉えられるといえよう。これに対して個人レベルの文化とは、一定の行動様式には基づいてはいるが、個別の状況によって形状や形態が異なる、それゆえこれに接する者は状況に即した判断力や行動力が必要とされる、動的な特徴を持っているように思われる。（この場合「ランデスクンデ」≡文化理解という認識で）文化理解をこのように捉えると、「異文化理解」と「異文化間コミュニケーション」という外国語教育上の概念に対応関係を見出すことになる。ここでは社会文化レベルでの「異文化理解」、社会文化活動をおこなう個人どうしの「異文化間コミュニケーション」という考え方ができるのではなからうか。こうして「ランデスクンデ」にはこの2つの側面が含意されることになり、とくにこれらのキーワードを読み解く上で必須の要素となっている「個人」あるいは「個人的体験」なくしては成立しないのではないかと考える。この場合、画一的で絶対的なランデスクンデではなく、個人の数だけ存在する、つまり異形体とし

でランデスクンデを捉える必要があるのではないかと思われるのである。一方で教育面に重点を置いていうならば、正しく異文化を理解し、——言語的であれ非言語的であれ——状況に応じた行動がとれる教師によって初めて活きたランデスクンデ教育が成立するのではないか、とも思えてくるのである。ひいては、これからのグローバル化の時代に決して無視することのできない、国際人の養成という教育的観点からも、教師自身が国際人としての自覚を常に持つ必要性を強く感じた次第である。

多少長くなったが、理論的教授法研究には全くの素人である私がこのゼミナールを通じて思い至った「ランデスクンデ」についての個人的な見解を述べさせていただいた。

さてこのような盛り沢山のプログラムで、また準備をする時間もほとんど取れないまま過ぎていった多忙な3週間であったが、このコースの主眼点である「ランデスクンデ」体験、DaFの専門知識の理解や教授法の習得など全てが至るところに散りばめられていた極めて内容の濃いゼミナールであった。ただ、個人的な理由（教授法研究への取り組みの浅さや教師としての経験不足）だけでなく、ヨーロッパ文化圏におけるドイツ語学習環境と日本におけるそれとの大きな相違¹¹といった理由から、今回習得した教授法の知識をそのまま日本でのドイツ語の授業に活かすことは難しい。どのように活かしていくかは、日本の外国語教育事情に合わせ、教師自身が常に意識して日々の授業実践の中から見出していく以外にないように思われる。むろんこれと平行して、引き続き日本における教授法研究の成果をとり入れて、ドイツ語教育の発展に寄与していかなければならないことはいうまでもない。

なお、ゼミナールのプログラムは、上に述べてきたように、質・量ともに十分過ぎるほどの内容であったが、私にとってそのこと以上に大きな（精神的）負担の要因となったのは、参加者たちのドイツ語運用能力の高さと議論の巧みさであった¹²。これらの大きな実力の差を目の当たりにし、私は全体討議で発言することは稀であった。つまり、あたかも教室内で発言するのをためらう学生が抱くような緊張感と不安感が常につきまとい、どのように状況を理解し、どのような言動をとるべきかという状況判断に思考力を使い果たしてしまうことがしばしばで、そのよ

うな場合には対象そのものについて思考・判断することが非常に困難であった。このような経験はしかし、異文化圏に身を置くことになるどのような日本人も最初は多かれ少なかれ経験することであり、2つの文化を比較・対照する上での貴重な材料となると思われる。それは同時に、ドイツ語を教える身にはとりわけ、上で述べたように、ランデスクンデ教育に直接的に結びつく価値ある体験であり、この意味でもまた「頭と心と手」を駆使してトレーニングを積んでいかなければならない身を改めて意識させられることになった。

ゲッティンゲンのゼミナールだけでなく、ホームステイの体験、語学研修などを通じて多くの人々と交流することができた「派遣プログラム」のすべてが私にとって極めて貴重な体験であった。

最後になったが、本「派遣プログラム」に関わった関係者諸氏のご厚情に、この場を借りて深謝したい。

注

- 1 本稿は、平成13年12月21日に、関西大学独逸文学会第94回研究発表会にて口頭でおこなった報告内容に、加筆・修正を加え、新たに文章化したものである。
- 2 平成12年度は、「インターネットによる言語学習」という総合テーマのもとで、東京ドイツ文化センターにて5日間の研修合宿（7月17日～7月21日）があった。新しいマルチメディア教材（CD-ROMやビデオによる学習ソフト、インターネット教材など）の紹介やそれらを活用した授業実践例についての報告、またその利用方法を体得する実習などを通じて、より効果的なドイツ語教授法を得ようと議論が絶えない日々であった。
- 3 ベルリンで参加した語学講習では、自分にふさわしいレベルのクラスでドイツ語の運用能力を伸ばすことができた。また、授業での学習のみならず、毎日のように開催されていた文化的催しに参加することで、ドイツの歴史・文化の理解を深めることができた。ライブツィヒでの個別研修では、専門研究に必要な文献を、国立図書館で収集することができた。またゲーテ・インスティテュートでは、新聞・雑誌などのメディアに掲載された、ドイツ語にかんする数々の記事を複写させていただいた。
- 4 この研修プログラムは、さまざまなタイプに分けられた、全部で59のコースが設けられている（参加者の教歴や学習者年齢層の違い、そして教授法の分

野別などで分類されている)。なお、これまでは何らかの奨学金給付を受けた者のみが参加対象であったが、2001年度より自費による参加も認められるようになった。

- 5 この理念はもともとイタリアの建築学校で生まれたもので、19世紀末に1つの教授法として教育界で議論され始め、ヨーロッパ全体では1920年代に1つの盛期を迎えることになる。ドイツでは教育改革の一貫として、1960年代の終わり頃からGesamtschule設立の基本構想の一貫として重要な役割を果たした。
- 6 フィールドワークとしては、各種の写真を取ったり、メディアテークや図書館、書店などで情報を仕入れたり、またガストファミリーにインタビューをとるなどした。また他のグループでは、個人的にコンタクトをとって専門家のインタビューをとったり、街中の市民の声を集めたり、また教育機関へ訪問したりなどさまざまであった。
- 7 自己主張を曲げない者や、自分の意見を簡単に変えてしまう者が出て話しが一向に進まなかったり、またミーティングを無断欠席する者がでたことすらあり、協調性の点で大きく欠けていた。
- 8 たとえば、文あるいは語や語句単位でばらばらに解体した詩をオリジナルのものに戻す作業、2つの詩がミックスされたテキストからオリジナルの詩を発見する作業、また詩の最終部分を自分で創作し原作と比較・対照する作業、さらに散文形式に改訂された詩をもとの韻文形式に戻す作業やその逆などヴァリエティーに富んだ内容であった。
- 9 またこの他には、ニーダーザクセン州文化省の文部官による文教政策についての講演や、カッセルのゲーテ・インスティテュート講師による、ドイツの大学卒業資格が取得可能な通信教育制度の紹介などの講演があった。
- 10 Landeskundeという語を、参加者の出身国の言語による表記とそれによって直接的に意図される意味内容のドイツ語を、めいめい黒板に書き記した。恥ずかしながら日本人チームはどのような語を選んだのか記憶が曖昧になっている(「ドイツ事情」„Kulturelle Verhältnisse in Deutschland“ではなかったかと思う)。
- 11 多くの場合、すでにモチベーションを持った学習者が対象であったり、また一定数の、発言することに困難を感じない学習者を見込んだ授業を想定していたり、学習効果を上げるうえで十分な学習時間を見積もっての構想であったりと、(日本の外国語教育現場からすると)理想的な学習環境を想定しての教授法モデルが多かったように思われる。また学習教材に関しても、

「平成13年度ドイツ語教育担当教員ドイツ派遣プログラム」に参加して

個別的には効果的な利用が可能であるが、継続して体系的に使用するにはさまざまな工夫を加える必要性が高いと思われる。

- 12 参加者のなかには自国のゲーテ・インスティテュートで教鞭をとる者やドイツで生まれ育った者も少なくなかった。また、たいていはドイツ語で授業をおこなっている「ドイツ語教師」がほとんどで、日本人以外、ドイツ文学あるいはドイツ語学を専門とする、「研究者」としての顔を持つ参加者はみられなかった。